しもまち キラリ

弘武館道場館長・剣道教士七段・居合道範士八段

弘中聖規さん

長年スポーツを続けて顕著な功績を挙げた個人らをたたえる、日本スポーツ協会の「日本スポーツグランプリ」を受賞。私設の道場を開設し、97歳の今も現役の二刀流剣士である弘中さんの飽くなき求道心に迫ります。

二刀流の聖地をほかでもない下関で

85歳で二刀流を始める

平成23年山口国体で地元代表として、藤井(良一・あ子)夫妻が二刀で出場し、成年男女でそれぞれ優勝を飾った1カ月後。藤井良一さんに1本の電話がありました。「山口県剣道連盟の相談役・弘中先生が、35歳も年下の私に二刀流の教えを請うて来られたのです。当時から、雲の上の存在である弘中先生が85歳にして二刀を始めるなんて、普通はそんな発想になりません。ただ共に稽古をしてみれば、さすが居合道範士。本当に紳士で、竹刀の使い方などこちらが勉強させていただいています」

▲打突音と気合いの中、弘中さんの剣が光る。

蘇(よみがえ)る二刀

弘中さんを二刀流へと想いを募らせたものは何だったのでしょうか。「藤井師範の二刀の遣いは、本当に無理がない、絵に描いたような姿でした。下関にはご存じの通り、宮本武蔵と佐々木小次郎とが決闘した巌流島があります。二刀流は武蔵が編み出した流派ですから『一過性のものにしてはならない。下関は由緒ある土地柄だから二刀流のメッカにしたい』という使命感に駆られました。そこで藤井師範に師事を仰ぎ、今日に至るわけです」

藤井さんは、弘中さんの想いに賛同し、稽古場を北九州から下関に移しました。弘中さんの私設道場で、年に数回開催されている稽古「二刀流錬成会」では県内はもとより、九州や関西、外国から下関に集い、剣の技を研さんしています。

「二刀では、例えば短いほうで相手の太刀を殺すことができる、抑えて中に入ると相手に圧力をかけられる、そこを

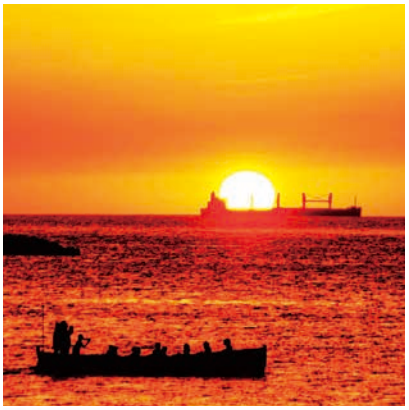
Linked Instagram インスタグラム

市報×インスタグラム連動企画
フォロワーの皆さんが投稿した下関の魅力が伝わる写真をご紹介♡

Vehicle That Travels Across Water

@boatrace.shimonosekiさん

@tatsuhiro03さん



@hebotaroudesuさん

Editor's note 編集後記

◆弁論大会の審査員の講評にあった「やっぱり親ってね、死んだ後も子どもを育てるんだよ」愛にあふれた言葉が胸に刺さりました。宮村
◆22ページの市報の感想や絵手紙、イラストに励まされています！皆さんありがとうございます。市大生とのやりとりも新鮮で楽しいです！廣野
◆厳流焼、漫画バガボンドだけの知識だった私。本物の二刀流を間近に見て、宮本武蔵著の五輪書を読みたくなりました。西村

◀韓国との親善剣道大会。その他海外との稽古や交流にも熱を込める弘中さん。

▶詩吟朗詠錦城会・全国大会で居合を披露。

◀ひ孫と稽古する弘中さん。子どもを教えるには、下がりながら打たせて、体得（納得）させる必要があります。年齢も考え後ろに下がることが難しくなったので、現在は大人だけを指導しています。

突く。二刀は大刀と小刀を連動しなければ、強みが出てきません。形が崩れやすく難しいんです。宮本武蔵は五輪書で『生きるか死ぬかは一寸の見切りにあり』と言っています。それが極意です。我々はその境地に近づきたいという想いで精進しています」と弘中さんは二刀への想いを語ります。

生涯剣道

弘中さんは基本稽古を欠かしません。毎朝5時半ごろに起床し、道場で詩吟を吟じながら走ります。声を出し、下っ腹に力が入る詩吟は、剣道の呼吸法に通じるものがあります。臨場感をイメージした上で、人形への打ち込み稽古をしたり、木刀で居合を6種類3回演舞したりしています。

大切にしていることを尋ねると、「すべてのものは基本を正しく習得しないといかんというのが教えですね。常に体の中心である正中線から打つ。無理がなく、力の省略ができる。そうでなければただの暴力です。動作が多いようでは負荷がかかる。大事な時に、相手から突かれる。私は、基本を正しくするという前提で稽古や指導をしています」

剣の道を突き進んだ先にあった二刀流の縁。それを紡いだのは、間違いなく弘中さんの求道心ではないでしょうか。